光に誘われてカイラス巡礼

青木　新門

昨年の夏、チベット高原を旅してきた。

自分でもなぜそんなところへ行ったのか不思議に思っている。

昨年の5月に歯が痛くなり、かかりつけの歯科医院へ行ったところ、写真家でもある友人の歯科医から「カイラスへ行かないか」と誘われ、即座に「行く」と応えたのだった。カイラスと聞いたとき、一瞬カイラスって何だと思ったが、次の瞬間冠雪の霊山が脳裏に浮かび、その霊光に導かれるように即答してしまった。

私の脳裏にカイラスが浮かんだのは、今から30年も前にその山の写真を見たことがあって、そのイメージが脳裏に残っていたからに違いない。30年前の私は、ひょんなことから葬儀社に就職し、死体をお棺に収める納棺の仕事を専門にしていたことがある。そんな死者と毎日接する仕事をしているうちに「人は死んだらどこへ行くのだろうか」と真剣に考えるようになっていた。そのころ出遇ったのが『チベットの死者の書』だった。この本を読んだとき、人の死後の世界を最も正確に描写していると思ったものだった。そして夢中になって読み、関連の書物を読むうちに、カイラスの写真の載っている書物に出遇ったのである。

カイラス山と、その山系から流れ出た川が注ぐマナサロワル湖のある地は、古来から仏教、ヒンズー教、ジャイナ教、そしてチベットの古代宗教であるボン教の最高の聖地とされてきた。仏教徒はカイラス山を仏教宇宙観の中心にそびえる須弥山（しゅみせん）のモデルとみなし、山頂で今もブッダが法を説いていると信じられている。またヒンズー教徒にとってカイラス山はその山頂の形をシヴァの象徴リンガ(男根)とみなし、シヴァ神の済む聖なる山であると信じている。ジャイナ教では初代教祖が悟りを開いたところとされ、ボン教では開祖のシェンラブ・ミボが空から降り立ったところとされている。

また今日のチベット仏教徒は、聖なる山カイラスは観音菩薩の化身と信じていて、亡命したダライ・ラマの写真を飾ると中国当局から罰せられるので、代わりにカイラスの写真を飾っている。私は、この霊山のことを書物で知ったとき、インド人やチベット人が古来より熱烈な信仰の対象としてきた不思議な山をこの眼で見てみたいものだと思った。

そんな思いが、誘われたとき即座に「行く」と私に言わせたのかもしれない。しかしいざ行くことを決めてチベットの旅行記などを読んでみると、とても私など行けるところではないような気がしてきた。

カイラスは、チベットの首都ラサから西へ直線で1000kmのところにある。直線で行けるはずがなく、平均で標高4000m以上という高地の曲がりくねった道なき道を行くわけで、実際は2000km以上の道のりである。その上カイラスの巡礼道は標高5000mの高地で、カイラス山の北面に出るのに25kmも徒歩で進まなければならない。あのネパールからヒマラヤ越えをしてきた河口慧海氏でさえ、カイラスを一周するときヤクの背にのっていても心臓が張り裂けそうに苦しいと『チベット旅行記』に書き残している。また色川大吉氏が私と同年の65歳でチベット旅行をしたことを知り、氏の旅行記を読んでみた。ところが、その本に「カイラスに死なず」と副題されているように、氏は途中で高山病にかかり、カイラスのベースキャンプで完全にダウンしてガモーバック(*1)に入って九死に一生を得て帰還していた。あの世界各地の高地を探検した人物が、である。

私は心配になった。登山の経験もなく、日ごろ駅の階段を息切れしながら上がっているのが実態である。念のためにと人間ドックで診てもらったら、血糖値が高く、完全な糖尿病だと診断され、5000mの高地など医師として許可はできかねると主治医は断言した。どうしようかと迷った。最初10人ほどの参加希望者があったのに、日が近づくにつれ3人になっていた。地方紙の新聞記者に「なぜそんなところへ行くのですか、山があるからですか」と聞かれ、「いや、光が招くから」と言ったらそのまま記事になっていた。私は行かざるを得なくなった。

＊

そんな私が、カイラスの北面が見える地点に立つことができたのが不思議であった。実状はダウン寸前のふらふらの状態での到達であったが、とにかく目的を達した。そしてチベット高原を縦断してカシュガルまでの4000kmの旅を高山病になることもなく終え、ウルムチ経由で帰還したのだから幸運と言うしかない。

この世には実際現場に立ってみて初めて知ることがある。チベットは1950年10月の中国人民解放軍の侵攻以来、国の形がなくなってしまっている。そして「近代化」のスローガンのもとに中国化が

青木　新門 / あおき・しんもん
1937年、富山県生まれ。早稲田大学中退後、富山市で飲食店「すからべ」を経営する傍ら文学を志す。**73**年、冠婚葬祭会社(現オークス株式会社)に入社。**93**年、葬式の現場での体験を『納棺夫日記』として著し、ベストセラーとなる。現在詩人としても活躍。日本文芸家協会会員。
著書に、『納棺夫日記』、『柿の炎』、随筆集『木漏れ日の風景』、詩集『雪道』など多数。

（＊**1**）高山病の治療に使われる携帯用の気圧室。
（＊**2**）仏教徒の礼拝方法の中で最高の礼法であり、両手・両膝・額という身体の**5**部分を地につけて平伏し、仏や高僧などに礼拝する動作をいう。
（＊**3**）『大無量寿経』にある言葉で、釈迦の顔が光に輝きその姿は清らかに輝いていたという意味。親鸞の思想の中核をなし、聖書のルカ伝やマルコ伝にも同様の意味の言葉が存在する。

強力に推し進められていた。街の目抜き通りの新しい家並みは中国人移住者が住み、中国語での登用試験採用のため、軍隊、官庁、商社なども中国人が独占し、チベット人は場末へ追いやられていた。出会ったチベット人たちのやさしい笑顔に深い悲しみの陰影が漂っていた。

私はそんなチベットの現状を見ているうちに、『ヴィタリテ』に連載しておられる奥村一郎氏の著書『祈りの心』に引用されていたパスカルの言葉を思い出していた。

「小事に対する人間の敏感と、大事に対する無感覚とは、奇妙な転倒をなしている」(パスカル『瞑想録』より)

パスカルの言う小事とは世事のことで、大事とは信仰のことである。蓮如も「後生の一大事」という言葉を『白骨の章』で残している。五合庵に住み、村の子供と毬をついて仏道を生きた良寛などは、小事に無感覚で、大事に敏感であったのかもしれない。

チベットの人々は自国を仏国土とみなし、信仰こそ大事であって、生活の向上などは小事とみなしていたようである。そのことが、近代化を急ぐ中国政府との軋轢の最大の原因になっているように思えるのだった。大事の捉え方が根本的に違うのである。

私はそんな思いを抱きながら、カイラスを目指した。ベースキャンプから巡礼道を歩き始めると、それこそ胸が締め付けられるように苦しくなって、2、3歩歩いては立ち止まって深呼吸をしながら歩いていた。チベットの巡礼者たちは、五体投地(＊2)をしながら私を追い抜いてゆく。私は唖然として立ち止まったとき、ふと八木重吉の詩を思い出した。

かなしみとわたしと
足をからませて　たどたどとゆく
かならずや
ひかりの世界があるだろう

そして今にも倒れんばかりになったとき、カイラスの北面が見える地点に来ていた。崩れるように座り込んで見上げると、眼前にカイラス山が超然と聳(そび)えていた。その姿をあえて言葉にするなら、姿色清浄(ししきしょうじょう)にして光顔巍巍(こうげんぎぎ)(＊3)といった表現が最もふさわしいように思えた。私はしばらく感動の中に座っていた。

やがて興奮が静まると、私は過去に葬式の現場で見た蛆虫の光や蜻蛉(とんぼ)の光や死者たちの顔に見た微光のことを思い出していた。あの光に出遇って私は『納棺夫日記』(文春文庫)という本を著したのだった。あのとき垣間見た光も、このカイラスの霊光と同質の光のように思えた。旅立つ前に「光が招くから」と言ったのも、その光と光がつながっているような気がしたからだった。

登山家が危険を冒して何度も山に登るのは「そこに山があるから」ではないと思う。山頂で霊光に包まれた感動の体験が再び行動をうながすのである。「そこに山があるから」といったのはイギリスの登山家ジョージ・マルローだが、いかにも人間が自然を対象化し征服してきた西洋近代人らしい言葉である。

私の言う光のイメージは、キリスト教では霊性(Spirituality)のことであり、仏教では仏性のことを言っている。しかしこうした体験でしか得られない神秘的な霊性や仏性は、非科学的と近代は完璧なまでに無視してきたのである。

私は、カイラスの巡礼道を仏教徒もヒンズー教徒もジャイナ教徒もボン教徒も仲良く一緒に巡礼している姿を見ながら、これらの宗教の根っこに共通の何かがあるからではないかと思った。ダライ・ラマ14世は自著の中で「光は世界の主要宗教すべてに共通するイメージである」と、聖書のルカ伝や仏典に見るイエスやブッダが霊光に包まれた場面をあげて語っている。もし世界中の宗教が共通の光で結ばれているなら、違いを認め合って共生することが可能なはずだ。それができたらどんなに素晴らしいことだろうと思いながら、私はカイラスを後にした。